

ステファンヌ・マラルメ訳

## 『エドガー・ポオ詩集』について



エドゥアール・マネ画（墨絵）

最近、本学中央図書館蔵となった稀観本、マラルメの仏訳による『エドガー・ポオ詩集』（1888年刊）に関して若干述べてみたいと思う。まず参考までに、原書名を以下に記してみると次の如くである。

LES POEMES d'EDOGAR POE, Traduction de STEPHANE MALLARME avec portrait et fleuron par Edouard Manet, A Bruxelles, chez l'éditeur Edmond Deman, MDCCCLXXXVIII.

（『エドガー・ポオ詩集』、ステファンヌ・マラルメ訳、エドゥアール・マネによる肖像画と扉絵カット付、ブリュッセル、エドモン・ドゥマン書店、1888年。）

この詩集出版に至る経緯を概観するに先立って、原著者エドガー・アラン・ポオ（1809—1849、フランスでは普通エドガー・ポオと呼ばれることが多いが、ポオ自身は2才で孤児となった後、彼の養父となったジョン・アランという富裕な商人の姓をもつてエドガー・アラン・ポオと名っている）のことに

教養部助教授 沼田 五十六

触れることから始めてみよう。

ポオと言えば、推理小説ファンの人なら恐らく、日本におけるこの道の草分けのひとり、あのおどろおどろしい『パノラマ島奇談』や『陰獣』の作者、江戸川乱歩の名を思い浮かべるかも知れない。あるいは、昭和30年前後に少年時代を送った世代の人ならば、あの懐かしい「少年探偵団」の歌も思い起こすかも知れない。ポオの作品に余りにも耽溺し過ぎた結果、自分のペンネームを心酔し尊敬する作家の名前にしたところに、江戸川乱歩という作家の並々ならぬ自信が窺えるわけだが、これも、コナン・ドイルがシャーロック・ホームズという名探偵を創り出す以前に、『モルグ街の殺人事件』（41年）や『盗まれた手紙』（45年）という一連の推理小説の中でデュバンなる探偵を活躍させていたポオの導きがあったればこそだろう。ポオの短い生涯で創作の最盛期にあったとされる1838年から1844年の間に書かれた作品の大半も、『アッシャー家の崩壊』（39年）や『赤死病の仮面』（42年）等の傑作を含めて、緊密な構成をもった短編小説の類が主であったことは確かである。しかし、彼の処女出版（27年）が『チムール大帝』と題された詩であり、また、45年に発表された彼の生涯で初めて大評判を博したといわれる『鴉』（『大鴉』とも訳される）も詩だったことは単なる偶然ではない。後世の評価はどうかあれ、彼自身は自己の詩作品を重視していたようであり、その死の前年に世に出た畢生の大作、詩とも小説ともいえない、強いて宇宙の交響楽とでも形容すべき『ユリイカ』（『ユーレカ』ともいう）を自ら散文詩と呼んでいる

のも領けることなのである。要するに、緻密に計算され尽くした諸短編小説も、ポオにおいては詩作品と表裏を成すものでしかなかったということなのであろう。

次に、マラルメの訳詩集にも当然収録されている『鴉』に関して少々付言しておこう。ポオはこの詩を発表した翌年に、この詩の成立過程を『構成の原理』と題する作品において自ら解説して見せている。その中でポオは、彼自ら処々で「超絶論者、(transcendentalist)と呼んでいる、詩作において理性よりも直感を優先させる一部の人々を念頭に置いた上で、「一番よく知られている『鴉』を例にとってみよう。その構成の一点たりとも偶然や直感には帰せられないこと、すなわちこの作品が一步一步進行し、数学の問題のような正確さと厳密な結果をもって完成されたものであることを明らかにしたいと思う」と書いて、この詩が偶然と詩的直感の産物ではなく、幾何学のように綿密に推敲されたものであることを、高らかに宣言しているのである。この詩論の要点をポオの言葉を借りて述べるとすれば、「快感は、専ら同じことの反復という感じから引き出される。そこでぼくは、全体として音の単調さは守りながら、一方では絶えず思想の単調さを破ることによって、効果に変化をもたせ、それによって効果を高めることにした。つまり、畳句(リフレイン)そのものは殆ど変えず、畳句の使い方に変化をもたせて、絶えず斬新な効果を生み出すことを心に決めたのである」ということになるだろうか。この畳句とは“nevermore”「最早ない」(マラルメ訳では“jamais plus”)という語であり、呪文のように鴉の口から繰り返し洩れ出るこの言葉が、暗鬱な状況に置かれた主人公の理性の閉塞する様を描写する上で、見事な効果を産み出している。このように、普通、怪奇と幻想の作家と見做されているポオは、研ぎ澄まされた感性と分析的な思考とを兼ね備えた詩人でもあったのである。

ところで、ポオを初めて全うに評価し、大衆から鬻ぎを買っていた(例えば、27才の年に13才の従妹と結婚したこと、飲酒癖による酒乱の気があったこと、泥酔の果てにボルティモアの路上で行き倒れ、4日後に病院のベッドで死亡したこと等)彼の不運に彩られた生涯を擁護したのは他でもなく、『悪の華』(1857年初版)の詩人ボードレール(1821—1867)であった。彼は自己の詩作の傍ら、ポオの主要な作品の翻訳に意を注ぎ、のちに象徴主義と呼ばれることになる文芸思潮の先鞭を付けたのである。少し遅れて現れたマラルメ(1842—1898)もまた、ボードレールの訳業に触発されてではあるが、ポオに心酔しきった詩人であった。マラルメがまだポオの詩すら読んでいなかったと思われる1859年に、既にボードレールが『構成の原理』の訳を添えて『鴉』の訳詩を発表していたにも拘らず、なぜ彼は、敢えてこの詩の訳を世に問うたのか。それは、彼が30才の頃知り合った、ルノワールやモネの先輩格にあたるマネ(1832—1883)の存在なくしては考えられない。あるいは、自分の前に大きく立ちはだかるかに見えたボードレールの詩業を乗り越えようとして、この先達の成果をも省みず、自己の訳詩を世に問うたのかも知れない。というのもマラルメは、1875年にマネの石版画挿絵六葉入りの豪華版『鴉』(LE CORBEAU)を出版しているからである。ただこの版本は、マラルメ及びマネのまだ正当に評価されていなかった時代の、時宜を得ない試みだったからか、240部という小部数の発行をもって中止されてしまう。なおこの版は『鴉』一編のみの訳詩(但し原詩の“THE RAVEN”を添えて)を掲載したものであって、88年版の訳詩集には、マラルメが既に折りにふれ文芸雑誌の処々に発表していた19編の訳詩が加えられることになる。彼は、ほぼポオの詩業の全体像を見渡せるといってもよいこの訳詩集に、75年の『鴉』にはなかったマネのイラストを載せたかったようだが、

A mon ami et Scolaste Albert Robin

Stéphane Mallarmé

ステファンヌ・マラルメの献辞（直筆）

それもマネの死によって果たせず、マネによる鴉の頭部を描いた墨絵とポオの肖像画を加えるだけで満足せざるを得なかったようである。いずれにせよ、貧窮に明け暮れ、評価されるよりも殆ど中傷の矢面に立たされ続けていたポオと、文学を信頼し、詩の極北を追求し過ぎたあまり、20才台の後半に狂気一歩手前までいく危機に見舞われつつも、一見穏やかそうな生涯（彼の表向きの職業はリセの英語教師であった）を送ったかに見えるマラルメとの間には、どこかで通底するものがあったに違いない。

最後に、この訳詩集出版に纏わるエピソードを少し紹介しておこう。この出版の前年にマラルメの代表作のひとつ、『半獣神の午後』を出版したレオン・ヴァニエなる人物が、当初この訳詩集の版權を握っていたのだが、この頃ある友人に宛てた手紙の中でマラルメは次のように書いている。「この本の出版についてはヴァニエが実権を持っていますが、彼はぼくをうんざりさせるために、また金銭の不如意から際限なく出版を引き延ばしているのです。」この友人とは即ちベルギー出身の象徴派詩人エミール・ヴェラーレンのことだが、結局彼のとりなしで、この訳詩集はヴァニエ書店からではなく、ブリュッセルのドゥマン書店から発刊の運びとなったのであった。この出し抜けの仕業にヴァニエは立腹し、この悶着はパリ第5区の調停裁判所に持ち込まれる羽目になるのだが、そこでなんらかの合意が成ったのか、翌89年に、ドゥマン書店の豪華本と内容は全く同じながら、簡素な普及版という体裁でヴァニエ書店からも『エドガー・ポオ詩集』が世に出たのであった。この事実は、マラルメの頑な一面をよく物語るエピソード

だと言えるだろう。因みに、本学中央図書館蔵の『エドガー・ポオ詩集』は、全部で850部印刷されたもののうちマラルメ用にとっておかれた75部のうちのひとつで、通しナンバー812と印刷された刊本であり、その中扉の上部余白にアルベール・ロバンという友人に宛てたマラルメ直筆のブルーのインクによる献辞が書かれていて、この意味でも世界に二つとない稀観本ということになる。

#### 【追記】

マラルメはある時、晦渋な詩ばかりをなぜ書くのかという世間の非難に対して、「新聞以外のものはどう読んだらいいのか御存知でない方が多すぎるのだ」と答えたと言われている。また最近、日本のある評論家が、高等数学にも匹敵する高邁な詩がなければ文学に進歩はあり得ないのではないかと、という主旨の発言をしているが、ポオ、ボードレール、マラルメともに、生涯を賭して自己の詩を高等数学の域にまで高めようと努力した詩人達なのであった。

比較的簡単に手に入りそうな参考文献を以下に挙げておこう。

- (1) 『ポー詩集』 阿部 保訳、新潮文庫
- (2) 『黒猫・モルグ街の殺人事件』 中野 好夫訳、岩波文庫
- (3) 『ポオ全集』（全3巻）佐伯 彰一・福永 武彦・吉田 健一編、東京創元社
- (4) 『悪の華』 鈴木 信太郎訳、岩波文庫
- (5) 『マラルメ詩集』 鈴木 信太郎訳、岩波文庫
- (6) 『マラルメ詩集』 加藤 美雄訳、関西大学出版部（各詩ごとに詳細な解説が付されているので便利かも知れない。）